

## 余山貝塚の壺形土器

須賀 博子

はじめに

下郷コレクションの主体を占めるのは、福田・椎塚・余山貝塚の3遺跡の資料群である。それらは、関東東部の中でも古鬼怒湾水系という、北東部よりのさらにまとまった範囲に位置する。余山貝塚資料の主体をなす加曽利B式土器の点数は、決して多くはない。しかしながら、加曽利B式土器の関東東部の地域性や、その中での遺跡の特性を考える時に、有効な資料を含む。

加曽利B式の小形壺形土器は、同B2式期の東部地域で見られること〔安孫子1981〕、また福田貝塚など特定の遺跡に多出すること〔鈴木・加藤2008〕が指摘されている。その実態の解明には、関東における壺形土器の成立と変遷、構成内容、そして分布の詳細を明らかにすることが必要である。ここでは余山貝塚の壺形土器を紹介し、その解明への嚆矢としたい。

## 1. 出土した壺形土器

今回リスト化した資料中では（17頁、第2表）、3点が対象となる。第1・2図1～3は、口頸部がほとんど遺存せずその形態が不明なこと、壺形土器としては頸部の縮約性が弱い点で、壺形土器に比定できるか疑問が残るところがある。しかしながら、胴部がほぼ完存する1・3に注口部は付着しないこと、頸部が内傾すること、また2は多くが欠落するものの、1に器形や施文の構成が類似していることから、ここでは壺形土器と捉えておく。胴部内面の整形にミガキが施されていない点は、多くの浅鉢や鉢形土器とは異なる点である。

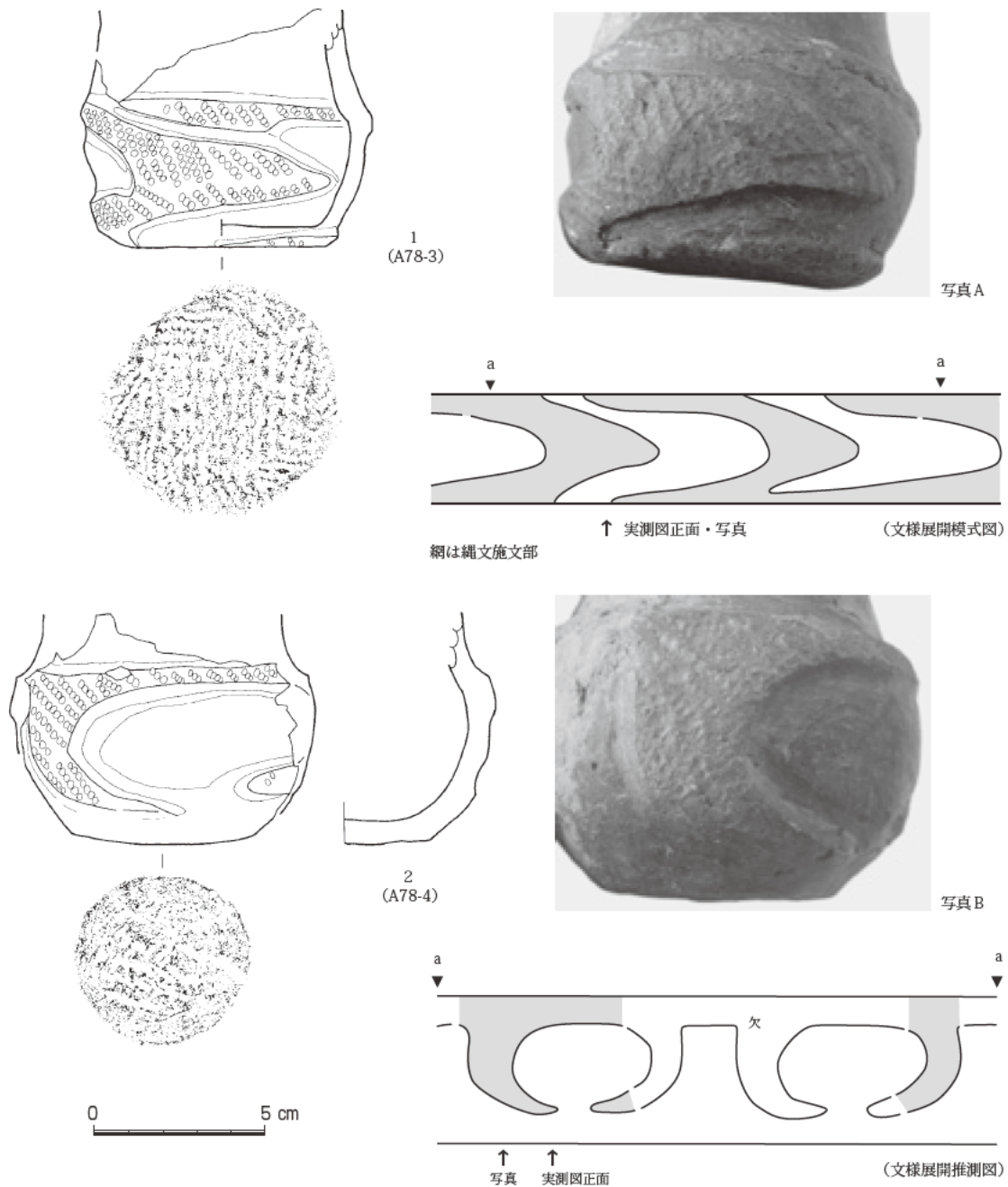
**第1図1（A 78-3）** 胴部が張出し、その上側の遺存部は、反りながら内傾している。平底の底部は比較的大きい。残された部分では、頸部の無文帯と、胴部の有文帯の2帯から構成されている。胴部の有文部は、その上端が極一部欠けるものの、それ以外の大部分が遺存している。胴部の最も張り出した最大径以下、底部までを施文域としている。胴部文様帯の下端を横位に周回する区画文はない。文様は底部まで施文され、モチーフの下端は区画描線では囲まれず、開放している。

文様は、曲線的な縄文により表出される。文様帯の上端から大きく横位にはりだし、屈折、垂下するモチーフが、2単位施文される。縄文施文部を区画する描線の下端は、底部に接する部分と、底部近くで横位に長く伸び、隣接する単位の区画描線と連結している部分とがある（展開模式図参照）。

その区画描線は沈線ではなく、稜によって表出される。稜の脇にはそれに沿う、やや太く凹線状にくぼんだ部分を観察できる所がある（写真A）。このことから、やや太めの沈線を引いて粘土を削り取り、その後ナデやミガキの整形を加えることによって、稜を作り出したことがわかる。縄文は単節RLで、節が比較的大きい。

底面は中心部に網代痕が残る。また網代を器体から剥がした後に、縄文が施文されている。頸部の無文部は、胴部文様の上端は横位、その上側は縦位に磨かれる。胴部の無文部には、横位のミガキが施される。内面は上部は横方向のミガキ、以下はナデ整形である。

内外面とも暗褐色を呈する。器体の赤化や炭化物の付着などの、煮沸痕跡は認められない。



第1図 壺形土器実測図(1)

第1図2 (A 78- 4) 胴部が膨らみ、その上部の遺存部は反りながら内傾する。頸部の無文帯と、胴部の有文帯が残されている。胴部の最大径以下を施文域としている。

胴部の有文部は欠損している部分がやや多く、約 2/5 程度が欠落する。

胴部文様帯の下端を、横位に周回する区画文はない。帯状の縄文施文により文様が出される。遺存部分から、先細りする弧状文が対向するモチーフが推測される。欠落部分が多いので不確実だが、同様のモチーフが、もう一単位、存在したのであろう (展開推測図参照)。

モチーフの上部は、区画描線が連結し縄文施文部が周回していたと推測される。その点では、この時期の「J」字状モチーフを横位に連ねる描き方と類似する。

モチーフ下端の区画描線は底部付近のミガキ整形もあり不明瞭である。しかし弧状を呈する点で、

モチーフの先端は、やはり「J」字状モチーフ同様、閉じられていたと捉えられる。

モチーフの区画は、第1図1の個体と同様に、沈線とナデ・ミガキ整形により削りだした稜によって表出される（写真B）。節が比較的大きな、単節RLの縄文が施文されている。

稜の下にはなぞりのナデ整形、無文部は横位に磨く。底部付近は横方向に研磨され、無文部を形成している。頸部は胴部文様の上端は横位、その上側も磨かれている。内面は張り出し部より上側は横方向のミガキ、以下はナデ整形である。

底部には中央部に網代痕が残る。器体から網代を剥がした後に磨かれている。

内外面とも暗褐色を呈する。煮沸の痕跡は認められない。

**第2図3（A 78-5）** 胴下部が張り出し、上位に向かい膨らみながら内傾する。口頸部は欠落しているが、すぼまる器形、内面の整形がナデのみである点などから、壺形土器と推測される。最大径は、先の2点と異なり、底部に近い所に位置する。底部は丸みを帯びている。

胴遺存部の上端には、横位に周回する区画沈線の一部が残っている（写真A）。底面付近にも横位沈線が周回し、文様施文部の下端を区画している（写真B）。区画内には、単節LRの縄文が、横位に施文される。区画内の施文は縄文のみだが、上下端が区画されている点で、磨消縄文の一種と捉えられる。縄文の節は、比較的小さい。

底面の無文部は、ナデ整形の後、間隔粗く磨かれている。内面は横位のナデ整形である。

内外面とも暗褐色を呈する。煮沸痕は認められない。

## 2. 壺形土器の位置づけ

第1図1・2は、曲線的なモチーフが描かれる点で、加曾利B2式の標識資料を出土した遠部台遺跡の、第5類として分類されたものの一部に相当する〔池上1937〕。幾何学的な磨消縄文は沈線により区画されるものが多い。しかし、数少ないが本例と同様に削りだした稜により区画される例があり（第2図参考A千葉県宮内井戸作遺跡）、下郷コレクションの福田や薬師台貝塚の資料中にも認めることができる。

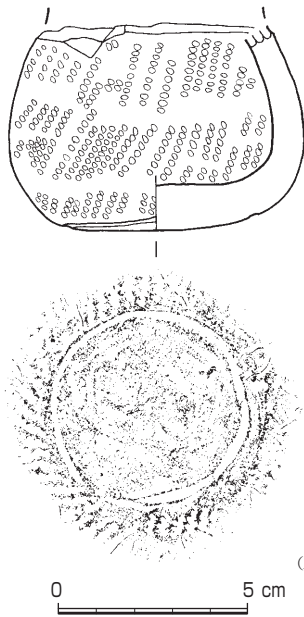
また、縄文は施文されないものの、加曾利B2式期の注口土器には同様の描出法による稜線でモチーフが表出されるものがあり、東北の南奥地方に系譜がたどれることが、余山貝塚より西方に位置する東京都大森貝塚の資料を検討する中で指摘されている（第2図参考B）〔鈴木1980〕。1・2はこのような製作技術環境の中で作出されたものである。

関東東部の壺形土器には横帯文を施文するものと、曲線的な磨消縄文を施文する2者が存在する。東北的な要素が、関東東部の中でどのような地域性をもって、どのように取りいれられていったのか、そしてその中で余山貝塚はどのような位置にあったのか、という課題が改めてみえてくる。

1・2は文様帯の構成、単位数や文様の表出技法などの点では類似しているが、文様の構成の仕方はやや異なっている。この時期の磨消縄文の系譜や変遷を整理し位置づけることも、壺形土器の理解の上で必要である。

第2図3は、丸底に近い点で、加曾利B式でも1式の新しい部分以降に位置づけられる。磨消縄文ではあるが、モチーフは1・2と異なる。時期的な関係性の問題とともに、余山貝塚の壺形土器の内容は決して単純なものではなかったことを示唆する。

加曾利B式の壺形土器を多出するようにみえる福田貝塚と、古鬼怒湾水系という点では同一の水系

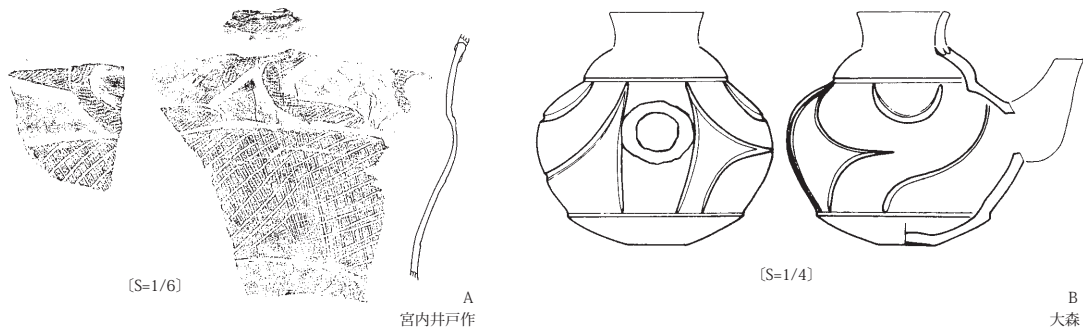


写真A  
(実測図略裏面)



写真B  
(拓本正面)

《参考》



第2図 壺形土器実測図(2)

に含まれる余山貝塚にも壺形土器が分布することを確認した。下郷コレクションの福田貝塚資料にも壺形土器は多く、椎塚資料にも存在する。また先ほど見たように、同時期の土器製作技法の体系と運用を考える上で比較すべき資料を含む。

遺跡単位での検討の次の段階として、近接する遺跡間のまとまった土器群を相互に比較研究できる点で、下郷コレクションのまとまりは重要であるし、研究を推進することで、コレクションの総体としての価値はさらに高まることになるだろう。

【引用・参考文献】

- 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『縄文土器大成3 後期』講談社
- 池上啓介 1937 「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺跡の研究」『史前学雑誌』9-3
- 印旛郡市文化財センター編 2009 『宮内井戸遺跡』
- 須賀博子 2012 「第1部3. 福田・椎塚の土器」『共同研究成果報告書』6, 大阪歴史博物館
- 鈴木加津子 1980 「第1部3 大森貝塚出土重要文化財土器解説」『大田区史(資料編)考古II』東京都大田区
- 鈴木正博・加藤俊吾 2008 「黎明期の考古コレクションと貝塚研究」『季刊考古学』第105号, 雄山閣
- 千葉県史料研究財団編 2004 「付章 千葉県史編さん資料」『千葉県の歴史 資料編 考古4』千葉県